

第三百十話 水葬の島:メレヨン島

個人的なことだが、小生は初級幹部時代に、第二代第一混成団長であったK将補にお仕えし、団長が中隊長として体験されたメレヨン島の飢餓状況下における指揮官の苦悩に関するお話を伺う機会があった。最近、「骨が語る兵士の最後」(檜橋修一郎著 筑摩書房)の、第5章3 同環礁での遺骨収集体験記を読んで「水葬の島」と称されることを知った。「戦わずして玉砕した悲劇の島」とも云われる。

1 メレヨン島に飛行場建設と防御力強化そして米軍は上陸を回避

小規模の監視所が設けられていたメレヨン島も、絶対国防圏の防御力強化及びマーシャル諸島での戦いに備え、飛行場建設部隊とその警備、防空部隊が上陸したのが、1944(S19)年2月末である。同島守備隊は、独立混成第五十旅団に改称された。



サイパンの陥落後、米軍はメレヨン島を無視して攻撃続行した。同島への補給は潜水艦により細々で行われたが、輸送任務の潜水艦も安全ではなかった。

2 メレヨン島慰霊碑碑文に見る苦難

『第二次世界大戦の戦局が急を告げていた昭和19年2月数度に亘り上陸した海軍将兵及び3千5百名と同年4月12日上陸した陸軍将兵3千3百名とより成る西カロリン諸島メレヨン島守備部隊は寧日ない米軍機の爆撃に曝されながら日夜防衛築城訓練に挺身したが戦況の悪化に伴い食糧医療品弾薬の補給は意に任せず同年7月サイパン島の陥落に続いてグワム島などの守備部隊が玉砕するに及び補給は全く絶え孤立無援となった 現地自活のための懸命な農耕と漁撈にも拘らずサンゴ礁の土壌は農作に適せず不備な漁具による漁獲は少なく食糧は日を逐うて窮乏し一時は主食1日一人百グラム給養となって生命保持の限界をはるかに割り全島に鼠トカゲ類の影を見ない状態となった■■熱病アメーバー赤痢等の風土病が蔓延し医薬品は欠乏して斃れる者が続出し総員6千8百名のうち爆撃による戦死者を含め実に5千2百名を失うに至った

私達は終戦最初の復員船回航のおかげで痩せ細った身を辛うじてこの島から生還し得たがその中の一部は上陸直後別府病院で亡くなった

この島での1年有半の体験は私達の脳裡深く刻み込まれて終生忘れることは出来ない 終戦から20年を経た今も尚私達は椰子の根元に埋葬した多くの戦友達の慟哭を聞くそして断腸の想を遠く南海の孤島に馳せ遺族の上に思を致せば万感胸に迫って慰問の辞を知らない 茲に生還者一同相寄ってメレヨン会を結成し亡き戦友の英魂を弔慰するため相扶けて陸軍部隊の主力であった南洋第5支隊編成の地福山市を選びこの碑を建つ』と

3 飢餓の状況

メレヨン島海軍医長によれば、1944年の一人当たりの主食の摂取量は以下の通りとのことである。「4月12日:720g、5月16日:580g、6月15日:500g、7月14日:410g 8月10日:360g、8月21日:290g、9月1日:240g、9月21日:190g、10月21日:100g」であったという。飽食の時代の今日からは想像も出来ない量ではないか。

4 葬法について

戦死者の数は資料により差異があるが、何れにしろ5000名の死者を埋葬する場所はなく、環礁の南側の小島で1200名を水葬にしたという。海軍は水葬が一般的であるが、陸軍は土葬或いは火葬が一般的であった。戦死率は80%近く、殆どは餓死だ。

尚、1966年来の遺骨収集で、3020体を収骨しており、残り1893体となる。この内、水葬1200体であるので、陸地部分には693体が残されているという。(上掲書196p)

5 S21年の安倍文部大臣の寄稿が物議を醸した。動機は不明だが、海軍側指揮官宮田大佐は1946/7/18自決し、最高指揮官北村少将は遺族への訪問を終えた1947/8/15に自決した。K団長の高潔な人格を考えると文部大臣の言には異議を感ずる。